

～幼保小の子どもの学びと育ちをつなぐ～

# 架け橋通信



第9号

令和6年9月発行

京都市教育委員会 学校指導課

幼保小の架け橋プログラム担当

TEL:075-222-3746

## もっと聞きたい!「非認知能力」を育む 乳幼児・小学生の子育て講座2

楽しもう!子どもの「はじめの100か月」～未来を創造的に生きる子どもを育むには②(6月29日開催)

【講演の主な内容】前回の講座に引き続き、京都教育大学 教授 古賀松香先生にご講演いただきました。

将来に亘って自分の力を発揮してよりよく生きていく。そのために今、大切にしたいのは子どもたちの成長に応じた非認知能力=学びに向かう力である。

### ■これからの世界を生きていく子どもたちに育みたい非認知能力

「粘り強さ」「感情調整」など非認知能力を育むには、身近な専門家である地域の就学前施設の先生と一緒に安心を基盤にたっぷり遊ぶことが重要である。乳幼児にとって大切な遊びとは、子どもが主体的に身近な環境に関わる直接的、具体的体験である。試行錯誤し、ものの特徴に気付いたり、考えたり、さらに工夫したりしながら、身近な環境をより深く知っていくプロセスが大事である。

### ■自ら「やりたい!」「楽しい!」と思ってやりこむ遊びの中で多様な感情体験を

子どもにとって世界はわからないことだらけ・・・だから、考える、面白いことであふれている。思わぬことが起こり「なんで?」と探究する。「なんで?」をともに楽しむ大人が支えになり、「もっと、こうしたらどう?」と考え、試行錯誤し、工夫する。この3つが循環し、やりたいことをやり抜く。その中で、「嬉しい」「悔しい」など幼児期にふさわしい多様な感情体験をしていくことが大事である。

### ■共感的な受けとめ、ポジティブなとらえ直しが大切

感情調整がうまく行える子ども、ポジティブに状況をとらえ直すことができる子どもは、認知能力面の伸びや学校への適応もよい傾向にある。そのためには共感的に子どもの思いを受け止め、ポジティブに捉え直す大人の関わりが大事である。

### ■子育てには支えが必要

地域の質の高い専門家とつながって、乳幼児期を子どもと一緒に遊んで楽しみましょう!

動画視聴はこちらから➡



他校園所の実践を知る

課題や悩みを出し合い、意見交換をする

今後の幼保小の架け橋プログラムの推進に生かす

## 幼保小の架け橋プログラム第3回情報交換会(9月2日)

竹田小ブロックの実践発表(竹田小学校 幼保小連携・接続主任 佐賀一俊先生)とグループ協議

### ○実践発表から

#### 【にこにこルームの設置】



空き教室を幼保のような環境に! 就学前施設で慣れ親しんだ遊具で遊び、安心して過ごす。授業で活用したり、時にはクールダウンの場としても。

#### 【体制づくり】



幼保小の架け橋プログラムを校内研究の柱に!  
全教職員で合同研修や保育参観、事後研修会に参加。

#### 【実践事例の紹介】

・生活科「いきものとなかよし」で幼保小一緒に指導案を検討。  
・図画工作科「すなやつちとなかよし」や生活科「もうすぐ2年生」で交流活動。

《成果》 教職員・保育者の交流(授業・保育のねらい、子どもへの願いの共有)から、架け橋期の子どもの育ちが繋がっていると実感できた。互いに学び合うことで、教育・保育の質の向上につながった。

### ○グループ協議(自校園所の幼保小の架け橋プログラムの実践による成果と課題について話を出し合う)意見紹介(抜粋)

〈子ども理解、教育・保育の相互理解〉入学前の子どもの姿を知る機会を意図的に設け、入学後の子どもが過ごしやすい環境をつくるのが大切。連携・接続で、学びを見取るところまでつなげていきたい。保育を見て学び、遊びの中に学びがあることを小学校の教職員が理解することが大事。幼保小で互いを知ることから始め、さらに、互いの願いや目的をすりあわせていくことが大切。

〈交流活動〉最初は積極的に小学校から就学前施設に交流の話をお願いしたが、1回交流して「楽しかった!」という思い出があれば、次は子どもから提案が出てくる。一度つながると教職員同士も気軽に交流ができていく。

〈環境設定の工夫〉1年生の教室におもちゃを置くスペースを設けたことで、児童はいろいろな友達と遊ぶことを楽しみにするようになった。そのことで出身園を超えたつながりが早くでき、喜んで学校に通えるようになっている。

〈連携・接続の継続〉幼保小ともに忙しいので、無理のない連携・接続が望まれる。連携・接続を持続可能にするには、組織を作ることが大切。教職員みんなで取り組むことが当たり前になればよい。授業のビデオ等を活用した研修で効率化を図る。

2 学期以降に実施する交流などを検討しましょう。

○生活科などの授業を通しての子ども同士の交流

生活科などの単元展開の中で、幼稚園や保育園でもよく似た経験をしていることがあります。その活動を幼保小でともに考え、それぞれのねらいを明確にして一緒に取り組むことで、互惠性のある交流になります。

交流活動例と 5 歳児・1 年生のねらいの例

★生活科「あきとともだち」の単元

「あきみつけ」や「つくったおもちゃであそぼう」などで交流してみましょう。

就学前施設でも秋には秋の自然に触れる遠足に出かけ、秋の自然物(どんぐり、木の実など)を集めたもので飾りをついたり、遊べるものをついたり、小学校の生活科とよく似た活動をしています。

【あきみつけ】



【活動】1 年生と 5 歳児で松ぼっくりや落ち葉、枝を集めて音を鳴らしたり、飾りをついたりする。

【ねらい】5 歳児:1 年生と一緒に「あきみつけ」をして 1 年生への憧れの気持ちをもつ。  
1 年生:活動のめあてや見通しをもち 5 歳児に関わってリーダーシップを発揮する。

【つくったおもちゃであそぼう】



【活動】小学校の「あそび大会」に 5 歳児を招待する。1 年生が作った遊びのコーナーで一緒に遊ぶ。

【ねらい】5 歳児:おもちゃに興味をもって遊び、1 年生にも親しみをもつ。  
1 年生:作ったおもちゃで楽しむ 5 歳児に接し、達成感・満足感を感じ、自信につなげる。

上記は「あきとともだち」の例ですが、「ふゆとともだち」の単元でも「かぜであそぼう」の学習で経験する凧あげ、氷づくりなどは、就学前施設でも冬の自然に触れて遊ぶ保育に取り入れています。5 歳児と 1 年生で凧あげなどの活動と一緒にする交流も考えられます。

★図画工作科「ぺったんコロコロ」の単元

絵の具や型押しなど一緒に活動し交流してみましょう。

就学前施設でも、絵の具とさまざまな用具を使って型押しをしたり、ルーラーと絵の具を使って色遊びをしたりしています。

【1 年生 図画工作科の様子】



【活動】1 年生と 5 歳児で様々な材料や用具を使って、形や色、うつけ方を試し、楽しむ。

【ねらい】5 歳児:1 年生に刺激を受け、色の美しさや形の面白さに気付き、絵の具遊びを楽しむ。  
1 年生:形や色、うつけ方を試すとともに、楽しみ、5 歳児や友達に思いを伝える。

【5 歳児 絵の具遊びの様子】



幼保小でともに活動やねらいを考え、一緒に活動することで、環境構成が豊かになり、子どもたちの意欲が向上するなど、それぞれのねらいが達成されやすくなります。また、教員・保育者同士の事後の話し合いで、子どもたちの具体的な姿から、子どもの変化を幼保小で共有することは、互いの教育・保育の質の向上に欠かせません。ぜひ、事後の話し合いの時間をもちましょう。時間調整が難しい場合はアンケートの交換など事後の話し合いの工夫をしましょう。

○運動会・学習発表会、授業参観などの行事も活用して、教育・保育の相互理解を深めましょう。

既にたくさんの学校で実施されていると思いますが、就学前施設の先生方を行事などに招待しましょう。小学校の子どもたちの姿や取組を知っていただくことは、相互理解に有効です。ぜひ、地域の就学前施設の先生方に小学校の先生方の子どもへの関わり、教材や環境の在り方など、教育のつながりという視点で見てもらいましょう。

コラム  
なかにしサンヨの 幼分補給

先日、実践研究校の 1 年生と 5 歳児の合同授業・保育を参観しました。暑い時期に幼稚園では色水や石鹸で遊ぶのですが、1 年生の学習にも「カラフルいろみず」や「なつともだち」という単元があり、幼稚園の場と豊富な素材や用具を活用して一緒に活動しました。1 年生は、活動への勢いや友達と言葉を交わす力がついており、1 年間の育ちの違いを感じました。魅力的な導入や子どもたちの動線考えた机の配置、材料や用具の出し方や置き方など「自ら主体的に環境に関わって遊ぶ」ための保育者の環境構成は素晴らしい、1 年生も 5 歳児もたっぷり 1 時間、夢中になって色水や石鹸で遊んでいました。

片付けの時間になり、先生が「とっておきの 1 本」をつくろうと呼びかけた時には、今まで散々色を混ぜて試し、石鹸の感触を楽しんだ 1 年生も、新たに「綺麗な色水」をつくり始めるなど、教師の新たな課題の意に添って、自分の行動が変えられるのだなと感心し面白かったです。

事前の打ち合わせで、環境設定や主たる進め役(5 歳児担任)を悩みながらも決めたことで、「子どもの主体性や自己発揮」を大事にした活動が展開できたのだと思います。事後研修でも子どもの具対的な姿からの見取りや教師の援助などの話ができ有意義な研修となりまし



中西 昌子(なかにし しょうこ)

京都市教育委員会 学校指導課 参与  
市立小学校教諭、幼稚園教諭、教頭、  
竹田幼稚園長、市教委首席指導主事  
を経て、平成三十年年度から現職。